写生会でのスケッチやデッサンなどの構図や色彩についての実技と指導法

日時：平成２８年7月２７日（水）
場所：のぼりべつ文化交流館　カント・レラ

伊達市立伊達中学校　　堀江　友里菜

写生会の題材と指導のポイント

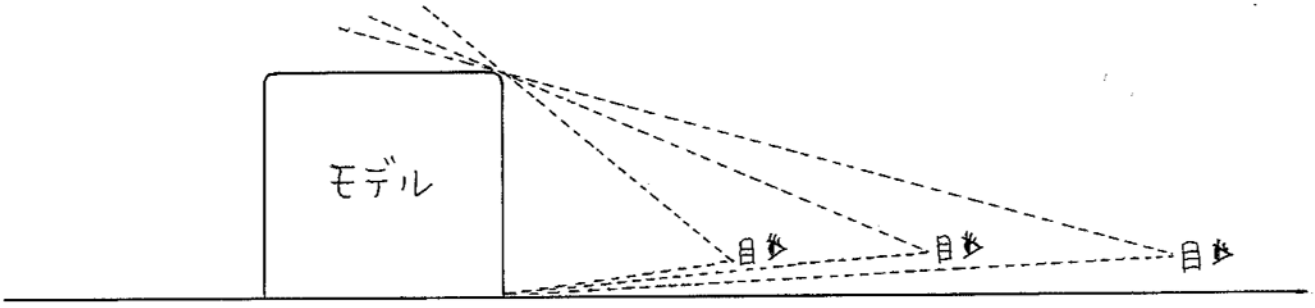
＜考えられる題材例＞
①文化的な建造物・・・お寺、協会
②乗り物　　・・・消防車、漁船、車
③その他　　・・・花、木などの植物、風景、生物、食べ物、静物

子どもたちに教えるときには、実際に生徒と同じ状況で、同じ画材で、事前に描いてみるといい！

〇写生会のねらいや目標を明確にしておくことが大切。
〇作成技法等の指導は、学年や子どもの発達段階に留意する必要がある。また、必要最低限にとどめることも大切だと思われる。
〇子どもたちの気持ちを１番に考えて、何を、どう描きたいのかを意識させる。

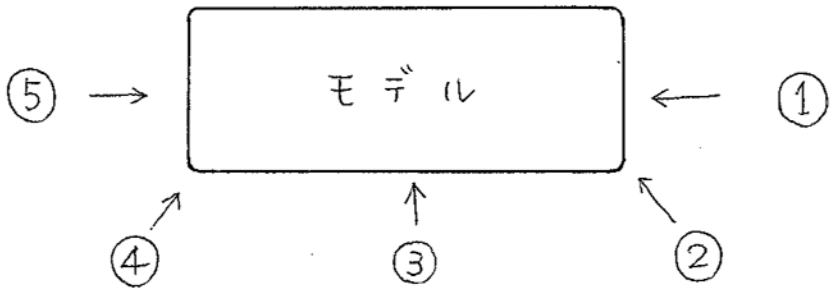
１．制作位置について

①見上げる構図について、距離による変化の構図



〇モデルに近いほど、モデルの画用紙に占める割合が大きく変化する。離れるにしたがって構図等の変化が出てくる。

②制作場所（みる角度による構図の変化）　そこを選んだ理由がきっとある。



〇平面上の構図：平面構成　①③⑤（モデルの１平面のみ）
　　：立体構成　②④（モデルの２平面が見える）
　　：①③⑤はシンメトリーの要素が強く出る。（動きが止まる。）

〇透視図法の構図：構造物が、透視点（消失点）方向への動きが出る。
　　：消失点の位置（画面の内外）によって、構図の変化が大きい。

２．現場指導の留意点

（１）全体的に

①場所決め
　１．一度、画材を持たずに個別に歩かせて、近づいたり離れたり、ぐるっと全体を見せる。
　２．興味や気になるところを確認。
　３．その場で、何をどう描きたいかをイメージさせる。距離や角度の調節。
　４．場所の最終決定（座って見る。）

②水彩画は、作成が難しいことを押さえておくこと。（やりなおしがきかない。）
③同じ高さの目線で出る。（生徒は座って、教師は立っていることが多い。見え方や世界が違う。）
④技術指導をしながら生徒と会話をし、生徒の制作意図や思い、意欲を引き出す。
⑤デジカメを有効に使う。（現場で完成しないときの、校内での制作時の参考にもなる。）
⑥飽きてしまうのは当たり前だと考えておく。そこをどうするか・・・会話の中から生徒が追求している目標を探し出し、制作の進捗状況を確認する。
⑦「できました！」への対応。（授業の課題や目標を再確認）
⑧迷ったり、行き詰ったら友達同士でコミュニケーションをとる。
⑨「見たように描きなさい。感じたように描きなさい。」はダメ。そんなことできたら、だれも苦労はしないので、「絵は上手に描こうと思う必要はないんだよ、気にしないで自由に描いて。」などと声をかける。

（２）下絵場面

①描きたいものにもよりますが、描きたいものは、画面の半分より上に、または真ん中にと大きく描くように意識させる。空や余白が大きな絵などの防止。
②あたり線と輪郭線と面
　〇あたり線→画面のこのあたりにこんな大きさのものがあるよというあたりをつける。おおまかにうすく描く。（全体の姿や構図を決める。）
　〇輪郭線→事物の境界を、線で輪郭を取る。
　〇面→面内（線で囲まれた空白）は明暗で表す。（明暗はハッチングで表す。）
③ときおり全体を見て、ゆがみ・ずれなどを修正する。
④絵を構成するもののあたりが（全体の構図）が決まったら、主要部分から細かく描いていく。

３．彩色法・着色（色の塗り方）について

○必要な用具

①パレット・・・絵の具を出すところ（小さい部屋）混ぜるところ（大きい部屋）で使い分けをする。
必要な絵の具を小さい部屋に大豆くらいの大きさで出させるといい。
②水入れ（筆洗器）・・・各部屋の役割（筆洗い用、すすぎ用、澄んだ水用）をはっきり分ける。
③布・・・常に筆先を整え、水分量を調節するのに使う。
④筆・・・点、線、面とそのサイズに合わせて、筆の大きさと形状を選ぶ。面相筆、彩色筆、丸筆、平筆などありますが、太い筆、中くらいの筆、細い筆の３本は持っておきたい。
⑤絵の具・・・赤、青、黄の３色あれば、だいたいの基本の色はできますが、10 種類はあるといい。
⑥試し紙・・・実際に描画する画用紙を小さく裁断しておく。紙質や紙色で微妙に変わることもある。
⑦色見本・・・同じ色までとはいかないですが、配色や混色のときに手元にあるとイメージがわきやすい。
⑧新聞紙・・・机に絵の具が付かないように必ず机の上にひく。

○絵の具での失敗例

子どもたちを見ていると、鉛筆で下絵を描くところまではうまくいっていたのに、絵の具を使い出したとたんに「あ～あ…」「失敗した！」「絵の具なんて嫌い！」という声をよく耳にします。低学年、中学年、高学年と教える学年によって着色については発達段階に応じた指導・支援があるとは思いますが、私なりに気がついたところを書いていきます。

子どもたちはどんな失敗をしやすいのでしょうか・・・

＜失敗例その１＞
絵の具がボトボト、はみ出す、たれる、にじんで広がる。ムラになる。

これは、パレットで絵の具や水を混ぜると、筆には多量の水分がたまっています。これを不用意に画面にのせた結果、余分な水分が画用紙にのり、上に示した失敗につながります。
水の量を、醤油やソースなどの子どもたちが知っていそうなものの柔らかさで表現してあげたり、色を作った筆は、必ず一度洗って余分な水を布でふき取ってから使用させるなどするといいです。

＜失敗例その２＞
絵の具の無駄遣いや画一的な色づかいに。

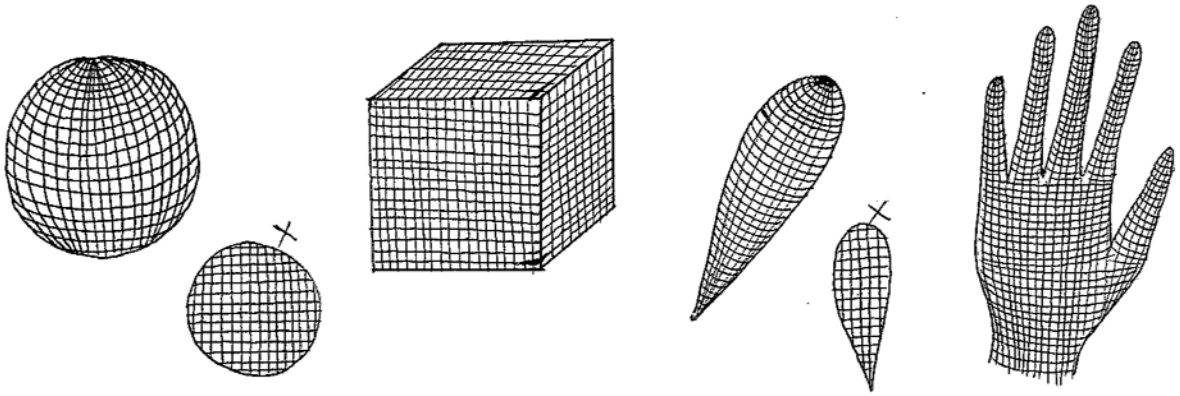
絵の具は代表的な色を 10 数種類製造し箱詰めしています。そうした基本色はその混色の組み合わせと水の量とでいくらでも色を作り出すことができます。ところが、混色の経験が少ない生徒は、単純な原色の組み合わせであっても、混色結果をイメージすることが難しく、子どもによっては、探求のあまり闇雲に混ぜて絵の具を無駄にしてしまったり、色作りが不十分なまま着色してしまう、もしくはチューブのままの色ですませてしまうことがよくあります。

赤、青、黄、白の４色があれば基本的な色は作ることができるので、１０数種類のチューブがあっても最初の段階はその４色だけを使い、この色とこの色を混ぜたら・・・という基本を覚えさせて混色になれさせるのも手だと思います。また、色見本を用意して作りたい色のイメージを持たせたり、作品となる画用紙に直接描くのではなく、まずは試し紙を用意し、そこに塗ってから作品制作に取りかかると失敗も防げます。

〇着色の基本手順

①広く大きい面や背景を先に塗る。大きい面は大きい筆で描く。
②細かい面を塗る。細かい面は細い筆で描く。

※最初に強い色を濃く塗ると修正が難しいため明るい色からうすく塗る。
※水の量を意識する。必ず余分な水は布でふき取る。
※描くものの流れを把握して色を塗ると立体感がでる。



読みづらく分かりにくい文章ですみません。今回の内容や指導の仕方は、私の経験や、やり方なので間違えてる部分や、参考にならない部分もあると思いますが、少しでもみなさんのためになると幸いです。

ありがとうございました。　堀江　友里菜